

## 令和3年度東播磨新地域ビジョン検討委員会 第2回 未来デザイン部会議事録

1 日 時 令和3年4月13日（火）10:00～12:00

2 場 所 加古川総合庁舎5階 A会議室

3 参加者 9名（一般4名 行政5名）

4 内 容

### （1）骨子案（案）について

委員） 資料1、骨子案をご覧ください。1ページから3ページ目までは事務局で作成いただいています。4ページ目が新しいビジョンの理念、将来像、方向性などについて、前回の部会でのご意見・ご提案を具体的にわかりやすく整理してまとめており、こちらの新しいビジョンの理念、将来像、方向性について議論していただきたいと思います。取組については、課題解決部会がメインになるようですが、こちらの方でも提案がありましたらと伺っておりますので、ご発言いただければと思います。では4ページの理念、将来像、方向性について進めていきたいと思います。順番に、一番左の理念からご意見いただければと思います。「水辺とものづくりでつながる未来」こちらの理念についていかがでしょうか。前回よりはかなりわかりやすくなったかと思います。

委員） 理念はこれで良いかと思っておりますけれど、出来れば「水辺とものづくりがつながり成長できる未来」のような感じで、どんどんと地域が成長していけるようなイメージがあったら良いのかなと思います。

委員） ありがとうございます。成長のイメージですね。

委員） 色々と考えていただいていると思います。

副局長） 前回委員が水辺は大事で、これをどうするかという意見をいただいたので考え直しました。水辺とものづくり。ものづくりは30年後どうなっているかわからないですけど。水辺は普遍的な地域特性かと思って、今のビジョンにも水辺とものづくりはありますけれど、新しいビジョンについても水辺とものづくりが東播磨地域の特性として、残しておくべきかと。この辺りは、外に出した時に議論になる可能性はありますが、事務局案としては残した上で皆さんに広く議論してもらいたい。

おっしゃるように、「伸びる」「成長する」という考え方は大事だと思いますので、また考えさせていただきたい。「つながる」というのは前回和田先生が「ネットワークでいくのかな」「この地域は核がない」というようなご意見をおっしゃっていたので、そこで「つながる」という言葉を入れさせてもらいましたけれど、ただ「つながる」という言葉自体、事務局としてもはっきりしたイメージが持てていないので「つながる」という言葉をどう発展させていくかというか、皆さんに想像いただけるような意味合いをどう持たせるかという。

委員) 「水辺とものづくりでつながる」というプラスのイメージがあると思いますが、どういう具体的なものに落とし込んでいくというのか、教育というのもあると思いますが、にぎわいをつくる、みたいなイメージもありなのかなと思っていました。「水辺とともにものづくりでにぎわいをつくる未来」とか、「にぎわう未来」とか、そういうのも。どこを目指していくのかというのをもう少し具体的にする必要はあるかと思いました。

委員) 畠山さんもおっしゃったのが、「成長」のイメージ。小林さんがおっしゃったのも、「具体的な方向性」というものですね。確かに水辺とものづくりでつながって、その先にルールがあるようなそんな感じもしますけれど、あまり限定しすぎてしまうと、そこら辺が難しいところで。

副局長) 「にぎわい」というのは方向性4の中で入れさせていただいた。確かに、理念であまりに具体性を持たせすぎると、次の目指すべき姿や方向性にそこが引っ張られすぎてしまうので、ちょっとそういう懸念はあるかな。むしろ畠山さんがおっしゃったような「伸びる」とか「成長する」なら。

委員) 東播磨の特性を考えますと、元々東播磨は農業の文化であって、そして雨の降らない地域だったので、たくさんため池が造られてきました。県下最大の河川加古川も流れています。その中で高度成長期になって、それまで農業が主な地域であった訳ですが、1960年代に播磨臨海工業地帯の促進に伴って、そこで海が埋め立てられて工場がどんどん出来ました。その時に若い人たちが兵庫県外から沢山やってきました。そしてこの辺りに住むようになって、小学校や中学校も増設するようになりました。それは今止まってしまった状態ですけど、新しい産業でここはすごく発展してきました。それが播

磨臨海工業地帯ということで、姫路やこの辺りが一体となって考えられていると思います。高速道路も出来てきましたから、農村部やそれまで働きに来ることが出来なかった距離からも来れるようになってきました。その成長はとても大きく、この地域の特色だと思います。これからのものづくりをどう発展させていく地域になるかというのは、これからの期待にかかる訳ですけども、今までと全然違う新しい産業、例えば宇宙開発の企業を呼んでくるとか、そういったことで全く変わっていく地域になっていく。特色がないと言われている地域なだけに、新たな可能性はいっぱい秘めている訳で、いくらでも創り出すことが出来ると思っています。ただこの理念については少しぼんやりとしたような感じとしながらも、それでも発展していくようなイメージがあればというように思います。

委員) 畠山さんがおっしゃったようにものづくりが地域の重要な力である一方で、ものづくりといういわゆる製造業にイメージが限定されてしまうようなところもあって、30年後を目指した産業の姿として、ものづくりはすごい特徴として良いし、大きな役割を果たしてきたけども、30年後の理念としてどうなのかと思うところも少しあります。

委員) ものづくりというのは和田先生もおっしゃるように、この辺りでもものづくりというと臨海部の大きい工場を思い浮かべてしまう。元々は東播磨のものづくりでも靴下とか牛とか家具とか、ものづくりは大きな工場だけではなく、そういう意味合いも今まではあったのではないかと思う。ただ、これから30年という時にものづくりというのが良いのかどうかというのはちょっと私もひっかかる。水辺は加古川があり、ため池がありそこを活かすという意味では、水辺は残してもいいかな。あとは、ものづくりというところを、人とのつながりとか人の部分でどういう風にするか考えた方が良くかなと思った。人というところ。ここは理念ですので、あまり限定的にはしないでぼんやりというか、「こんなこと目指そうね」ぐらいの理念で。この東播磨にはこんなことが必要だね、考えが良いよねということをするのであれば、そのままものづくりということではなく、新たな30年に向けて少しその部分はもう少し考えていったら良いかなと。

委員) 理念の下に書いてある、「産業と人とのつながりを深め、新たな未来を創り出す」という部分はすごく重要だなと思います。ものづくりが理念にぽんと出てくる

のが。だからといって何が良いのかと言われると難しいですけども。

委員) 今のビジョンの課題もあるかもしれませんが、住民が参画したいなと思うようなところがあれば。市民が自分たちで街を変えられないかな、街づくりしようかなと思わせるようなビジョンを作らないとやっぱり参画してくれる人も少ないでしょうし、わくわくするものでないと人を惹き付けられないというところがあると思うので。理念だけではなく、全体を通してという話になるかもしれませんが。そういうところで作っていかないといけない。

委員) 今良い言葉が出たと思います。「水辺とものづくりでわくわくする未来」みたいなのはいかがかと。今、「わくわく」という言葉が出たので。

副局長) 今回新しい総合計画が高砂市で4月から始まりましたけど、「わくわく」という言葉がありました。

委員) 前の東播磨県民局長も「わくわく」をよく使っていた。

委員) 「わくわく」という言葉は人を動かす熱量になると思います。「わくわく」がないと。お金がそこで発生する訳でもないし、自分たちの思いをそこで叶えていくというのは「わくわく」が原動力になっていくのかな。

委員) 住んでいる人が関わりたくなるような「わくわく」というのはすごく重要です。どの地域もそうですけれど、住人があまり積極的でないというのは悩みですけれど、関わっていくことが楽しい。自分たちが関わって未来が変わっていくとかそういう。

副局長) 理念のところに書いてありますけれど、「まちや歴史、自然、産業と人のつながり」というのは、産業と人というだけではなくて、「まちや人」「歴史や人」「自然と人」「産業と人」という風にかかっている。わかりづらいけれど。

委員) 「わくわく」という言葉は方向性などのどこにもない。書いたら、「わくわく」とはどういうことですか、となるとは思う。心躍り、楽しくなるようなことでし

よう。

委員) 今回のビジョンも、「楽しいまち」分科会に人が沢山集まったということは「わくわく」を求めている人は多いということだと思う。半分以上の人が。

前回のデザイン部会でも出ましたが、北の方の地域は危機感を住民の方が持たれているので、人が参画しやすいのかもしれない。ここはやはり、ある程度温和な地域ということもあって住民の方たちが危機感を持っていないというところが特徴としてあると思うので、逆にそういう地域にあっては「わくわくする」「楽しい」で参加してもらう方が良いのかもしれない。

副局長) 県北部だと危機感があるから参画せざるを得ないけども、この地域はそうではない。

委員) 県北部は「やろうぜ」とリーダーシップを持った人が生まれやすい地域なのかもしれない。ここは違う切り口で、「わくわくする」という観点で人づくり、街づくりをする方を生み出していけたら。

委員) 東播磨地域は、衰退が顕著な地域ではないということで、危機感ではないアプローチが重要。

とりあえず、理念はこの場で決定するものではありませんよね。今日のご意見を参考にまた修正するということですね。

副局長) はい。また来月にお集まりいただきますので。理念はデザイン部会だけでなく課題解決部会も合わせた全体の検討委員会でお伝えすることになる。

委員) では、そう簡単に理念についてすぐ結論が出る訳ではないので、とりあえず意見を汲み出していただいて次の将来像にうつりたいと思います。前回より大分すっきりと整理されてビジョンに近づいてきたなという気はしますけれど、この3つの分け方だったり、内容だったりについて、ご自由に発言をお願いしたいと思います。

委員) 1「自立快適・東播磨」のところで、方向性のところに移ってしまうところもあるのですが、「軽やかに動き、いきいきと暮らす」という中で、軽やかに地域を

移動出来るのは変化する道路、交通事情だけではないと思います。コロナ禍でテレワークが普及して、働き方も変わりましたので「住まい」についても、これまでの常識であった拠点を一ヶ所にして住むという居住スタイルから、都市や田舎の暮らしを自由に選択しながら住めるようになっていくと思います。

また県下の小学校で都市と地方の学校の二つを行き来して多様な生活を体験するデュアルスクールの取組がありますので、空き家対策に繋がるのではないかと思います。デュアルスクールが30年後も続いているかどうかは別にしましても、他地域で短期、長期でお試しの住まいがあればその地域の自然や伝統文化、街の魅力を体験出来ますので、人生100年時代を何倍にも楽しめるのではないかと思います。

委員) 「軽やかに動く」は確かに道路や交通の話だけではなくて、住まい、教育は非常に重要だと思います。

委員) 今、月10万円とか12万円を支払えば、敷金などいらなくて家具も備えついていて、必要なものだけ持っていけばいいというのも人気があるようです。

副局長) 全国のあらゆるところに住居を移して、仕事は全部テレワークでやっている若い人が多いようです。

委員) 住宅もサブスクリプション。定額を払ったら色んなところに住めるという住まい方。

副局長) 例えば東播磨地域ではどういった住まい方になるでしょう？県の将来構想試案の中にも、前回委員からご指摘いただいた「軽やかに」がありましたけど、「軽やかに」という言葉は表現が広いですから。例えば東播磨だったら「軽やかに住む」だったらどのような形に？

委員) 空き家対策。空き家を登録していただいて、そこに住んでいただくというような。

副局長) 住民だけではなくて、人を呼び込むきっかけにもなるということですか？

委員)　そうです。

委員)　稲美町とかで、日常はテレワークをしながら土いじりもしたりなど。

委員)　テレワークはこれから増えていくことは確実ですけども、あらゆるものがテレワークで対応できる訳ではなくて。実際テレワークに完全に移行した際に、人のつながりを求めるというのがあって、完全にはテレワークにならない。そういう実験がコロナ禍前にあって、テレワークの実験をされているのですが、テレワークに移行して生産性は上がるけれども半年ぐらいすると「やはりオフィスに戻りたい」という人が結構出てくるという話。やはり実際問題完全にテレワークというのは難しい話で、何かあたらしいつながりを生み出すといった場合にやはりオフィスは必要だということもあって、そういう意味では東播磨というのは良いポジションにあると思います。すごく田舎だと移動がしづらいいし、敷居もすごく高いけれど、稲美町とか北の方は田園風景が広がっていてそういう場所ではあるけれども、週に1、2回オフィスに行くのだったら苦にならない距離感。前も言いましたけれど、この辺り東播磨は活用できる特性なのかなというところで。市街化調整区域もなかなか。空き家はあるけれど、うまく活用出来ないというような建物がある。それは古民家だったりして、見る人が見たらすごく魅力的だけど活用が現状されないというところがあって、その辺り畠山さんがおっしゃったような仕組みでうまく半年、数ヶ月ぐらい住めるようになったらすごくポテンシャルがあるのかなという。三宮とか大阪に通うという意味でもそうだし、職場となる事業所も東播磨地域にある訳なので可能性はあるのかなと思います。そういう意味で「軽やかに動き、いきいきと暮らす」というのに暮らすだけでなく、住まい方もあるし、住まい方があると当然教育の話とかコミュニティの話につながっていくと思いますけど、「軽やかなコミュニティ」「軽やかな教育」そのような。

副局長)　「軽やか」という言葉は割と汎用性がある。

委員)　空き家とかもそう、住み方が変わるということによって地域のコミュニティをもう一度形成するというのが非常に難しくなる可能性があるので、そこは置いて他でいってしまうということならばその地域はどのようにしていくのか。自治会のあり方とか、全てを新しく作り直さないといけない。もうそういう時期にきているのかもしれない。みんな年を取って自治会や老人会もみんなやる人もいないし、潰れてい

ってしまうところと、新たに作っているところとあるのですが、相反することになってしまう。いかに軽やかに暮らすか、二つ軸がありますよとか一体どっちに軸足があるのかというのはあるけれど、働き方や生き方が多様化してきているので、今度はそのことを地域で助け合うコミュニティを作るのに、下には「地域ぐるみで安心して子どもを育てられます」というのもあるので、新たな地域がこういったものになるのか考えないといけないと思ったりします。

委員) お試しに住もうということで、試しに住んでみて良かったからここにずっと住もうというようなことが増えていくというのはあると思います。私は実際家2ヶ所を行き来していますけれど、加古川市内ですから2ヶ所町内会費も支払ってきました。今のところは10年前に引っ越しましたが、前のところともお付き合いをしているような状態です。前に住んでいたところは高齢化が進みまして、災害時に若いお母さんは自分の子どもを迎えに学校に行ってしまうけれど私たちは取り残されてしまうのではないかと不安を持っておられました。50歳以上の女性を対象に二つの隣保で女子会を作りまして、私がお世話をしてきました。こちらに引っ越してもお世話を続けて月に1回だったり2ヶ月に1回お食事会やお茶会を開いて地域の人たちと出来るだけつながっていくという役割を果たしてきました。ですから、2ヶ所あるというのは楽しいです。近いですから週に2回ぐらいは管理に行けます。全国でお試しのようなものがあったら私は行ってみたいと思います。

委員) 一般的には、私たちの町内会もそうですけれど、親と子どもが別々に住んでいても子どもの分の町内会費は払いませんという方もいらっしゃいますね。本当は独立しているのであれば払わないといけない。みんながそういう意識、リーダーとして育てて行ってそういう地域を作り上げていくことは大切ですけど、一般的にあまりそういうことに関わりたくないと思える人がどうしてもあるという今の現状。こっちに住んでいてもそういう方が多いので、そういうのをどうしていくかというのはある。本当に新しい地域というのを考えないといけないかなと思う。どうしても町内会に入ったらあれこれさせられる、それが苦痛だと思ってしまうと誰も行かないし、先ほどのように新しい人と楽しみたいと思えたら一つの地域として成り立っていけるのですが、一般的にはなかなか難しい面もあるなという風に思いますね。新たなネットワークなりをつくるというのが大事かなと思います。



委員) コミュニティのあり方の話というのはこの5つの方向性の中にはありませんね。出てきていない。

委員) 2の「地域ぐるみで安心して…」の子育て支援がそうですかね。それが協働、コミュニティということかな。全体でうたっているものはない。

委員) 2のところに「生き方、働き方の選択肢が広がり」とあって、ここが新しい形のコミュニティかなと。ここにもう少し新しい形のコミュニティが出てくると良いなど。

委員) コミュニティについて思うのは、2の「安心活力・東播磨」の防災のところ。防災の話はあまりしてこなかったと思いますけれど、防災についてはM8~9クラスの南海トラフ地震が30年以内に70~80%の確率で起きると言われています。また地球温暖化の影響もありまして、大雨の発生件数が増加傾向になっていますので、集中豪雨や台風が多発するシーズンの防災は課題であると思います。東播磨は比較的災害の少ない地域であることから、加古川は氾濫しないと思込んでいる人が少なくありません。しかし、平成27年9月茨城県で、台風18号の通過に伴って記録的な大雨が降り鬼怒川が決壊しました。そのことは皆さん覚えておられると思いますけれど、加古川はこの鬼怒川と流域面積、堤防の高さが似ています。鬼怒川が決壊で加古川の対策が見直され、加古川の2日間総雨量750ミリの浸水想定区域が示されるようになりました。私がちょうど国土交通省の流域委員をしていた時なのでこれに関わっております。いつ起きるかもしれない災害ですけど、災害と隣り合わせの中で暮らしていることを考えますと、防災の基本は自分の命を守る「自助」、行政による「公助」には限界があるため、地域や職場で助け合っていくという「共助」が欠かせないと思います。そのために今後地域や多様な団体との連携を心がけて顔の見える関係を築いていくことになるかと思えます。いざというときの備えは勿論ですけども、万一災害が発生した場合でも早く日常を取り戻せるようリスクマネジメントを行って復元計画を立てておくことが必要だと思えます。これからのことになるかと思えますけれど、30年後は技術が進化した未来を生きることになりますから、人口減少と超高齢化が進み一人暮らしの高齢者が増えたとしても東播磨で様々なロボットが造られるようになり、災害時の避難を促す見守りロボットも造られているかと思えます。

今、川崎重工もロボットを沢山造ってられる。どんどん計画を立てておられます

し、三菱重工は宇宙開発に今は力を入れております。高砂に三菱重工がありますよね。ですから企業にとっても生き残るためにはやはり世界の動きを見ながら未来に携わっていくものを開発していくと思いますので「新しいものづくり」というのが臨海部に出来ていくのかなと思います。臨海部かどうかもわかりませんね。

委員) おっしゃった通り加古川は氾濫しないというイメージがあります。加古川のすぐそばに住んでいるので、決壊したら家も流されてしまう。絶対氾濫しないと思っ込むのは駄目ですね。その時は升田山に登らないといけなくなりますけど。

加古川も昔は氾濫を繰り返していた川なので。絶対はないということをみんなが知っていないと、絶対起こらないということはありません。畠山さんがおっしゃったように助け合うこと、そして他とのネットワーク。これからは地震が来る、大雨が降るなど複合災害のようになってしまうでしょうから。

日常的には「加古川を活用させていこう」というのが。「川をもっと活用させよう」と前の局長はずっとおっしゃっていたが、カヌーをやったり、川沿いを自転車で走るとか、マラソンもある、ツーデーマーチもある。そういったことも含めて川というものの活用。公共用水などに使われているというのも勿論あるけれど、違った意味でわくわくする場所にもっと川を活用していけるのではないかな。普段は、雨が降ったら駐車場の部分が流されていくとかは今までもありましたけど、川の活用。これだけ大きな川だから、活用しながら健康やスポーツというのも考えていくこともあると思う。だけど防災というのも大事。2番目に「防犯・防災」が入っている。

副局長) 方向性としては1の中に「犯罪や災害から暮らしを守る」と入れている。大川さんや畠山さんの先ほどのお話は、おそらく取組の中で検討することになるかと思えます。取組は課題解決部会で。勿論、この場で言うだけでいいかというご意見なども取組に取り入れていきたいと思っている。

委員) 方向性を議論しながら、取組に同時に言及していただいても。連続的に出てくるものだと思うので。その辺り方向性と取組は関連していますので、ご発言していただいたら。

方向性で気になるといえば、2の「ひとを育み、生きがいを実感できる」で、「地域ぐるみで安心して」とあって、やや若者寄りになっているのかなという気がします。続きの「生き方、働き方の選択肢が広がり、自分らしさや大切にしている価値を追求でき

る」は全世代の話ですが、高齢化社会ということを考えると、高齢者が健康でいきいきと暮らしていけるというようなニュアンスももう少し出した方がいいのかなという気がします。元気で働くとか、別にお金のために働くのではなくて、生きがいのために働きやすい東播磨のようなものがもう少しあればと思いました。

1と2の方向性は意見が出ました。関連してある程度出てきてはおりますが、3、4、5で意見などがあれば。

委員) 2の「地域ぐるみで安心して子どもを産み、育てやすい環境が整い」の部分で、地域ぐるみで安心して子どもを産み、育てやすい環境としてそれぞれの市町村に子育て支援センターというものがあります。就学前の子どもを対象に親子の触れ合いや、自由に遊べる交流広場になっているようです。本来児童虐待の多発とか、養育困難家庭の増加など、子どもと家庭を巡る問題が多様化・複雑化して問題発生の予防とか親子関係の調整に向けて、解決をはかるということを目的として造られてきているところがあります。

世界を見ますと、グローバル化の影響もありまして、幼児教育は非常に重要ですから、様々な改革が行われていて、就学前の子どもが就学予定の学校と接続が行き渡ることが特徴で自然科学や算数を学び思考力、問題解決能力、コミュニケーション能力を高めるという教育が行われています。

一方日本では幼稚園、保育園の不足で待機児童がいる状況にあります。加古川市にも待機児童がおります。昨年の2020年に教育改革が行われまして、子どもたちの考える力や新しいことを学ぶことの喜びを感じる心の育成が重要になり、幼児教育と児童教育を円滑にする接続を進める動きがありますが、まだまだ十分とは言えない状況です。幼児期は脳の成長が活発になる期間であり、生涯に渡る人間形成の基礎を培う重要な時ですから、30年後には全ての子どもが発達段階に合わせた幼児教育を受ける環境が地域に整っていることが望ましいと思います。日本は幼児教育をあまり重要視してこなかったというように思います。でも国際社会に通用するような子ども、世界に通用するような子どもと兵庫県でも言われておりますが、そうした子どもを育てていくためにはやはり幼児教育がすごく重要になってきます。特に小学校は小1プロブレムというのがあります。幼稚園と小学校で接続が出来ていないので、今まで預けられていたところが保育所というところや託児所であったりするために、じっと座ることが苦痛で授業中でも立ち歩いてしまうという。そういうことがこの頃どこの学校でも起こっていて重要視されています。ですからやはり発達段階に合わせて幼児教育が

きっちり受けられるという環境が整っていくことが望ましいなと思います。

委員) 地域ぐるみで。今それでも子どもの問題というのは色々新たな問題が出てきています。貧困の問題もあるけど、今日の新聞にヤングケアラーの問題もありましたし。ただ、子どもさんの成長、発達障害の問題、孤独、引きこもり等色んな問題が子どもの中にありますよね。幼児教育のその辺のところからずっと改善していくというのと、それから真にそういったことがこれから30年の間に起きないということ、そういうことをどんな風に考えていくか、そういうことが無い良い社会。SDGsでもそういう風に、貧困のない社会を作りましょうということにしているけど。東播磨もまあそういうことも含めてどうしたら良いのか。いっぱい子育て支援とか、支援センターもありますけど、NPOもいっぱい、加古川も結構盛んにそういう子育て支援の活動をやっておられる方もいらっしゃる。そういう人を色んなところでやっている方をネットワークできちっと繋がって様々な問題をすぐ出してみんなで解決していく。ただ一つの役所がやっているだけじゃなく、色んな民間の人も合わせたそういうコーディネートするところも必要。社協かどうか分かりませんが。そういうようなことをして問題を地域の福祉の問題を、高齢者の問題ももちろんありますけど。そういうところも必要ではないかと。取り組みの中で少し考えられたらいいのではないかと。なかなかそういうネットワークが出来ているようで出来ていない。ここのシミンズシーズというのはあるそういう役割も含めてあるわけだけど。高齢者福祉もそうですが。そういうネットワークを作らないとなかなか難しいかな。個々で問題を抱えるより一つの地域として何とかしようということを考えていかないといけない。

委員) そういう取り組み同士の繋がりというのは課題があるということですか。

委員) 課題と言うよりは、まとめたりするところは結局何かがある、子育てでも福祉でも何でもコープでもかなりやっているが、そういう所が他の所と一緒にやっていますか、というとそこらのネットワークは社協でやってはいる。社協と一緒に登録してやってはいるが、なかなか。もっと協力し合いながら地域全体の課題として考えていくことが出来れば一番良い。

委員) 全県のフォーカスグループでも色々話していたが学校、小中学校高校と地域と関わりというか壁があって、その繋がり結構、学校教育としては地域の活動、

地域の仕事とつなぎたいがつなげられないということがある。東播磨は夢のたねというグループが小学校に入って職業人と関わるような取り組みをしていると思うが、それは1対1みたいな形になっているのかも知れないが、そういう学校教育と地域の活動をつなぐような役割も重要なのかなと考えています。

その時に来られていた丹波のビジョン委員 OBの方、一般社団法人 Be という団体を作られていてその方も学校教育と地域をつなぐような役割の人って必要だよねと思われるっていて、そこでビジョン委員から NPO になって今社団法人になった取り組みらしいですけど、各小学校に入り込んでそういう地域の方、地域のキーパーソンを呼んできて話をしてもらうような取り組みを継続的にされているようです。そういう取り組みを、県の方と目を付けて全県の教育委員会の人と一緒に仕事をしていくと言う話をされていた。そういう取り組み、ビジョン委員会からそういう団体が出来てくるのが一番良いとは思いますが、ビジョン委員がハブになるというのも一つ、話としてはあるのではないかと。

委員) 人を育成、つなぐ人が必要。個々ではすごく良いことしている人が居るが、自分が一番だと思っている人も居て、どうしても余所と話はしないっていうことになってしまうと良くない。

委員) 地域に触れやすい地域の方への学びというのも、この地域の良さというのも学んでいくでしょうし、地域独自の学びというのもあるでしょうし。全県の方のシナリオの 39、受け継がれる地域のところにも、小学校の教育の中で郷土学習を取り入れていくってことが書かれていたが、そういう地域を誇りにしていくような学びをすることによって、下の方にも書かれている地域の祭りだとか、私も祭りが盛んな地域で育っているので、祭りの時期になるとそわそわしてきます。高砂の人もそうだと思いますが。そういう世代間をつなぐ一つのイベントだと思います。祭りとかがないところは学年毎で区切られていて多世代の交流が全くないですけど。祭りとかっていうのは多世代の交流が出来るものなので、多世代での交流が進んでいくことによって地域の愛着、地域の誇りが醸成されていくものだと思う。

でも他地域から来た人、やってきた人が入りにくいという課題がものすごくあって、古い方しか残らないという状態に今なってしまうと思うので、そこをなんとかする取り組みがあれば。理想像なのかも知れませんが。都会の人はそういうのを嫌がる。都会の人も入りやすいような、祭りの敷居を下げっていくような。他の人を来

させないぞという地域もあつたりすると思うので。

委員) これからはそういうことをしていかないと祭りも継承されない。それだけ人も減っていくし、その中で住んでいる人も少なくなっているし外国の人、学生やら地域ぐるみでなんとか継承していくことが必要。地域にも色んな人が住んでいる、高齢者や子育てもある。結局一つのことに焦点を合わせてすることも重要だが、皆が関わられるような、小さな子どもから高齢者まで関わられるようなもの、スポーツであつたりそういったことがあれば一番。そういうことをしながら健康を考えたり。健康な東播磨ということで。

委員) それが地域の魅力になっていくと思うし、自分の出身の地域がどういう特徴があるのか聞かれて何も答えられない人がやっぱり居る。加古川などは色々な物がありすぎて。地域には市民がPR出来るような魅力や誇りを持っておかないとそういうことが出来ない。

委員) そう意味で小学校のデュアルスクールが進められていくんだらうと思えます。都会の人たちが田舎の学校と体験するという、2つの学校を行き来することによって子どもが成長していったとしても体験したところのお祭りのときには必ず帰ってきて手伝うとか。そういう繋がりが出来ていくだらうと思えます。おそらく人口が減少していくような地域にとってはそれも狙いの一つだらうと思えます。

委員) 都会の人が地方で学んだり、地方の人が都会で学んだり。都会の人が地域での住み直しがそこで起きる可能性もあります。

委員) 逆もあります。都会の子ども達が、中学受験があるということを田舎の人たちが知って、それなら都会に行くということで行ってしまった場合もあるみたいで

委員) 東播磨の難しいところは、都会なのか田舎なのか。

委員) 贅沢だと思います。何でもありですよ。

副局長) 僕みたいな田舎者からしたらほんと贅沢だと思います。

委員) 本当に何でもあって。だからあんまり欲しがらないですよ。適当にありますから。都会も近いし。

委員) その辺ガツガツ都会に出て行かなくてもそれこそ受験したくなったら一応受験していける学校はあるし、みたいな。私立もありますし。

委員) 都会と田舎かそういうのが混在しているので。そんな田舎でもないし。

委員) 新快速が止まるということがすごく大きいですよ。

委員) 加古川はね。JR一本で行けますから。そういう意味では高砂とかは危機感が出てきますよね、人が行き来するという意味ではね。そこでは高砂も祭りを含めた伝統を中心に町おこししていくということになりますでしょうけど。それでは東播磨全体ではどういう風に考えていくか。

JR沿線はやはり明石にしても便利ですよ、一本で行ける。ただ北へ行くときにね、今日もバスで来ましたけどバスの本数が減っていますよ。それと今日は加古川バイパスで事故があって、事故があると皆下の道路へ降りてくるので、今度は橋が詰まって渋滞してしまう。

委員) それこそ方向性1。

委員) やはり軽やかに、事故が多いので。今道路作っていますよね、橋を作って中津の方へ抜ける道。そういう面では北の方へ行くバスなんかも含めて、交通機関がこれからどうなっていくのか、バスが行かないようになってしまったら。自分たちで会社でも作って運営していくようなことも考えないといけないのかもしれない。

副局長) 30年ほど経ったら自動運転が普通になっていて、事故とかも無くなって、家の前まで来てくれるような。

委員) スマホでもそういうのはあると思います。

委員) 中国の深圳などはすごいですけどね。映像を見ていたら本当にすごい。話にならないほど。いずれ追いつくでしょうけどね、ここにも書いてある空飛ぶ自動車とか。そういう自動運転が出来たら事故もなくなるしね。

副局長) 自家用車というものがないかも知れませんね。自分で運転はしない。

委員) シェアで今しているので、自動車も売らない活用の仕方をするかもしれない。売れないから。若い人は今自動車も乗らないから。

委員) 一つ、繋がりのお話があって、大川さんも言われた子育て支援とかも色々な団体はあるけど必ずしも上手くつながっていないという話もありましたし、小林さんが言われた異世代間のつながり、そういう世代間のつながりに東播磨独自の特徴であるお祭りが重要な役割を果たしていくのではないかというお話もありました。

つながりというのはすごく重要な部分で、先ほども話に出ていた、ビジョン委員がつながりのノードみたいに機能すれば良いみたいなことを言われていましたけど、何かをやるというのはわかりやすいが、つなぐ人材というのはただ説明すると分りにくい。つなぐ人材を積極的に育てるというのはすごく重要だと思います、意識して。

古いコミュニティから新しいコミュニティに変わっていくという部分でも、もともとある古い組織というものも重要で、密なコミュニティというのも重要だけれども、それが凝り固まっているだけではダメで、新しい人たちがいることで軽やかに動ける、軽やかに生活できるということを考えると、積極的に古いコミュニティと新しい人たちがいたり、同じテーマの組織をつなぐとか色々なレベルでの「つなぐ人材」を育てることが大切。これが方向性に入るのか、取組に入るのかは少しわかりませんが。実際に取り組んでいかないといけないことかなと、皆さんのお話を聞いていて感じたところです。

委員) ビジョン委員もそういう意味では、自分たちでグループをつくって活動する。終わってもそれがつながっていくというのはありますけれど、そういう「つなぐ人材」というか、ビジョン委員がつなぐ、「〇〇財団」みたいなものをつくって、つなぐという役割だけしましょう、何か困ったことがあったらつなぐということだけしましょうと。自分たちが何かをするのではなく、ここにつないだらこう出来ますよとか



目指してしていましたが、これもビジョン委員の一つの役割というか。自分たちも主体的に活動に関わるけど、つなぐ役割のある人を育てていく、それもビジョン委員の役割ですよ、と。今、そういう方向に進めようとはしていますが、そういうのも一つの方向性かな。そういう人はやはり必要ですよ。

委員) ビジョン委員会自体も何かをしたいという人がつながる仕組みですよ。意図的に誰かとつながりたいと行くのではなくて、何かをやりたいと思を持っている人がそこに集まるから、そこでつながって化学反応が起きて今の活動になっていくという仕組みになっていると思うので。つながるからこそ、自分たちのつながる役目になっていくという。

委員) ビジョン委員とは一体何なのかという。必ずしもやりたい訳ではない、人に言われたから嫌々入っているという人もたくさんいるでしょうし、

委員) 他の人も「こういうことがやりたい」「こういうことがわくわくする」というのを聞くことによって、自分の気持ちも変わっていく。

つなぐというところで、最後の方向性5ではビジョン委員がため池と人をつなぐという役割も担っているかなと和田先生のお話を聞いて思いました。コミュニティプランナーズでは、ため池をかいぼりすることによって、地域の子どもたちが参加することになり地域とため池をつなぐことが出来る。他の地域では、フェンスをため池に張って「ため池に近づくな」というようなこともしていますけれど、小さい頃からため池に触れることによって「ため池はこういうことをしたら危険だけど、こういう役割がある」というのをわかってもらうつながりをビジョン委員が行う。

委員) お年寄り。むしろお年寄りの方がよく知ってらっしゃる。お年寄りから子どもにかいぼりを教える。子どもにとっては、外来種も含めて、ため池に棲む生物の勉強にもなる。そういう意味では富木さんがため池のかいぼりをされているので。

委員) ため池のかいぼりにつきましては、今地域の小学校が関わってきています。小学校の一学年がそこへ行って全員でかいぼりを行っている。学校行事としてやっている。加古川市や稲美町。

委員) 神戸だと田植えの体験がありますけれど、そういうようなものとして？

委員) そっちもあります。ちょうど、中学校はトライやるウィークがありますけれど、一つの中学では町内が受け入れを行います。町内会の色々な行事に関わってもら。勿論田植え体験もありますし、ホテルが飛びますから、交流している多可町八千代区に行ってホテルを見学したりとか、あるいはその地域にあるお寺の住職さんのお話を聞く、そのような地域の色々な体験をされています。学校では職業体験として、企業に行く人も多いですけど、そこでは全部町内会が5日間預かる。

委員) ほったらかしのところもありますけどね。ため池でもあまり何もしていないというところもあったりする。

委員) 庁舎2階の地域振興室水辺地域づくり担当がやっているため池協議会に入られたら、その人たちが関わって応援に行ってくれます。

委員) ため池協議会というのは？

委員) ため池協議会というのは改修するときに来ています。改修するにあたっては、国から50%、県から29%、市から14%の助成金が出て、あとの7%を地域の人たちで負担する。その代わりに、そのため池は地域全体で共有の目的で関わっていくものでないといけないという条件があります。それによってため池を色々改修していると思うので、その時に各種団体がため池協議会を作っておられます。

私もため池協議会が出来る前に、水辺に学ぶプロジェクトという形で色んなところに行かせていただいてフォーラムをさせていただいたり、色々な行事を行ってきました。

委員) どれぐらいの大きさのところで協議会はあるのでしょうか？

委員) 協議会というのはため池に関わっている町です。ため池を使っているところですね。だから地域によってはため池を沢山抱えているところもあります。加古川の志方で13個ぐらい抱えているところもありました。ため池が沢山あるところもあるし、逆に1つしかないところもあります。

委員) 協議会同士のつながりというのは？

委員) 協議会同士をつなぐのは庁舎 2 階の地域振興室水辺地域づくり担当です。

委員) 加古川の神野にフィールドステーションもある。ため池ミュージアムもある。

委員) 水辺に学ぶプロジェクトというのはビジョン委員会から生まれたグループではありますが、そのような地域と関わっていたり、ビジョン委員 OB が活動されていて、市町などの行政と関わっています。

あるときは国土交通省から依頼があって、「若手職員の研修があって川のビオトープを作るので一緒に手伝ってほしい」と言われて連れて行ったこともあります。

授業に関しましては、生き物の観察とか自然体験をするのですが、それは教育委員会を通して学校にお願いしに行きます。2ヶ所学校に行っていて、交互に行きます。でないと、あまり沢山来られても受け入れきれない。事故などがあっても怖いです。スタッフに限りもあるので 100 人ぐらい。

委員) ビジョン委員会を母体とした組織がつなぐ役割を果たしている訳ですね。

委員) 子どもたちに水辺の魅力を伝えていくという活動です。

委員) 縦横のつながりをビジョン委員 OB が果たした。ありがたいことです。

委員) 行政も含めた水辺の色々な組織をつないでいくという、そういう何かのテーマでつながる。あと地域の中でつながる。色々なテーマと、地域という縦横のつながりを持って。一応理念の中でも「つながり」はありますが。

副局長) 「つながり」というのは、大事なキーワードになりそう。

委員) 「つながり」ということで言えば、東播磨の工業、ものづくりと地域のつながりというのも結構気になる場所ではあります。小学校だったか、職業につながる

ような形で工場の見学などに取り組まれている団体もあったと思いますが

委員) 小学校は今でも工場見学に行っているのか。昔はキッコーマンの工場とかにみんなで行った。

委員) 今も行っています。

委員) 地域とのつながりで言えば、将来に向けての準備もそうだと思いますけれど、東播磨の大企業の工場が地域の産業と実際どのようにつながっていくのか。その辺りが気になります。将来に向けた、ものづくりという言葉を使うかどうかはともかくとして、産業の場として重要な役割を持っていると思います。

副局長) あまり東播磨のことは存じておりませんが、確かに神戸だと川崎重工の周辺に中小の鉄とかを扱う工場がものすごく沢山ありますよね。おそらく川崎に卸している。そういうのはどうでしょうか。

委員) あります。神戸製鋼所の周りにも関連企業がずらっとあります。

委員) そういうのがある程度蓄積されているということは良いと思いますが、地域とのつながりが少ないと東京や本社なりの意思決定でどうにでもなってしまうという性格がやはり大企業にはあるので。

委員) 神鋼フェスティバルとかかれて、地域の住民にとってお祭りみたいになって一緒にやる。地域の人たちも神鋼のグラウンドで色々なお店を出されて、焼きそばやたこ焼きの屋台を出したり。今はコロナで中止していますが。

それと私はこの庁舎2階の環境課と海辺でゴミ拾いみたいなことをしていますが、東播の工場の若手の人たちもやってきます。

委員) 地域と積極的に関わっているんですね。

委員) そういうことがないと、企業としては成り立たない。今、企業がやっていることそのものが社会貢献だというように変えていこうとしている企業もある。SDGs

との関係もあるだろうけど。企業が稼いだお金で社会に還元するというのではなく、企業が行っていることそのものが社会貢献だと。社会貢献することが企業の生き残る道。

委員) 里山整備を行っている企業もありますね。

委員) 変わってきている。昔は社宅などがあって、この辺りも日本毛織が出来た時は地方からいっぱい人が来たりして、集まってきたけれど。

副局長) 今、ニッケの社宅はボロボロになっている。

委員) 三菱にしてもみんなそうですが、昔は社宅があって街に人が増えて活性化されていった。今は社宅がなくなってしまって。どこからでも会社に行けるようになってしまった。神野も開発がされて地域に住んでくれた。

そういう意味では企業もあり方が変わって、衰退とともに人もいなくなってしまうという。加西も三洋電機があって栄えていた、今はパナソニックになっているけど。地域もそういう意味では衰退する。難しい問題。少子高齢化で人が増える訳でもないし、70歳だろうが80歳だろうが年寄りも働かないといけないし、働かないといけないようにこれからはなっていくし、そういうことに合わせた何かつながり、人のつながり、地域につなぎ止めることも必要だ。東播磨でつながっていくことも。

副局長) この間の部会でも出ましたが、外国人が増えた。どの産業でも。この間知ってびっくりしたのが、香住の船の乗組員の半分以上がインドネシア人。日本の漁師ではない。

委員) 漁師をしている人が少なくなっていること。キツイので安い賃金の人に任せてしまう。

委員) 方向性については、みなさん大体意見は出尽くしたという感じでしょうか？

委員) 将来像の3「環境交流・東播磨」とありますね、環境交流というのはどのような？

委員) 将来像は基本2つの熟語が組み合わさっている。

副局長) 「環境交流」が何を表しているかではなくて、「環境」と「交流」は別である。1も「自立」と「快適」、2は「安心」と「活力」。間に「・」を入れた方が良いかもしれない。

委員) 「環境交流」だと環境で交流するように感じる。勿論それもあるだろうが。

副局長) 「交流」は「環境」だけではなくてもっと広い。

委員) 東播磨の特徴を出さないといけないから。兵庫県全体は、全体的に網を被せているので、色んな項目がありますけど、東播磨は3市2町を特化させないといけない。難しい。

委員) 方向性の4「人・もの・情報がつながり」は良いと思いますけれど、いつもこれまでの取組や評価などでも製造業の話ってなかなかビジョンというか、どうしたら良いのというところで身近に関わりにくいという感じがして、「多くのスタートアップやグローバル企業が」というこの辺りというのは、東播磨としてやるのでしょうか？全県レベルの産業政策なのか？どういうイメージなのでしょうか。

副局長) 起業・創業は全県的にやらないといけないテーマであると同時に、それはやはり東播磨でもやらないといけないテーマだと思っています。

課題解決部会でも、まちの賑わいを取り戻すには既存のものづくりだけではなくて新しい企業、若い企業を育てないといけないというような話がありました。

この寺家町でもぽつぽつオフィスとか開いたりしていて、高砂でもコワーキングスペースは出来たりしています。ものづくりの街としては、まだまだその部分は全然足りていないかなという気はします。むしろ田舎の方が。例えば丹波篠山だとコワーキングスペースが結構あったりする。そこでは丹波篠山の伝統産業とは全く違うようなイノベーション的なものがあって、そういったスタートアップや創業が沸き起こるような地域になれば良いなと思います。

委員) 勿論そうだと思います。丹波篠山は、農業と絡んで何か新しいことをスタートアップするって比較的個人でイメージしやすい。東播磨みたいに大規模な工場相手と何かつながってスタートアップというのは、かなり田舎の方でのスタートアップとはレベルというか性質が違うというか。

副局長) 違いは出さないといけないと思っている。

委員) そこらへんでちょっと。地域経済としては、単純に大企業と下請け企業があるみたいな形ではなくて、本当に相互作用が起こって新しい産業が生まれるというような、イノベーション的な産業が生まれる。

副局長) 既存のものづくりが融合して何か出来るような。

委員) それが東播磨地域に望ましいつながり。工業と地域のつながりみたいなところが。

副局長) ここで言い表すのは少し難しい。おそらく取組のところで変えていく。

委員) 東播磨の特徴だけど、ビジョンとしては取り入れるものではないような。

委員) 市民の方にどう伝えていくかも工夫が必要なところ。

副局長) 靴下はそうかもしれませんが、播州織とか豊岡のカバンなど、全県的な地場産業というのは何かありますか。3市2町で。

委員) 建具がありますよね。国包(くにかね)の。

委員) 有名ですよ。靴下や、タオルも。稲岡工業のタオル、稲岡工業は潰れてしまったけれど。

委員) 「人・もの・情報」のところで、バーチャル体験など、新しいことが経験出来るようなことも良いかと思います。兵庫県でも宇宙開発に携わる企業が沢山あるの

で、東播磨でも宇宙開発みたいなのがサプライチェーンとして一つ出来たら良いと思います。宇宙開発と言っても輸送だけではなくて、月に行ったり火星に住むというようなことも考えていますけれど、そこで長い間過ごしていくためには食糧が問題になる訳です。食糧の問題開発については、これから人口が増えていく地球上において、食糧問題解決につながっていけるようなやり方が出てくるかと思う。

例えばシンガポールなどでしているかもしれないですが、日本は台風が来るので難しいところがあるかもしれませんが、海上ファーム。上は農業をしながら下は魚の養殖をするという取組がなされている。オランダのような海に面しているところはしていると思います。海外でも続々増えてきているので、30年後ならそういった技術が生み出されていても良いと思います。

委員) 全体の大きな流れとしては、そういうようなことが言える。むしろ、「人・もの」がつながるというところに関して言えば、将来構想試案の「進む地域経済循環」「コミュニティビジネス」や活性化とか。このようなことを東播磨でも出来るようなのがあれば地域の課題解決に、自分たちが起業ではないけど、ワーカーズコープ（労働者共同組合）、その人たちが集まって出資して。そういうことも必要ではないかなと思います。課題を解決するのに自分たちが働いて、そして自分たちの地域の課題解決が出来るという。12月に労働者協働組合の法律が出来て、今までワーカーズコレクティブという新しい働き方。それがワーカーズコープだったり労働者協働組合になったようですが。そのようなのも一つの地域活性化、人とのつながりも含めてコミュニティビジネスでつなぐというのもそういうのを自分たちで。NPOとは違い自分たちで資金を出し合って、そんなこともつながりという意味では大事なかなと全県ビジョンでも意見しています。

そういうのでいえば、古民家の再生やら何やらも全てそういう新しいコミュニティビジネスになり得る。多可町八千代の巻き寿司もそうです。自分たちで巻き寿司を作って、そういう地域の活性化。地域の名物を作っていくって。

委員) ビジョン委員の取組がNPOになったりとか、スタートアップの芽が出るかもしれない。そこからNPOや企業が生まれていく。そうしたら地域がにぎわう。

委員) それと30年後に向けてわくわくしていくようなものが欲しいですね。大川さんがおっしゃるようなのは今からでも始めてほしい。



委員) 自分たちで出資して。NPOは出資しないので。それで働き方になる。家にも出来る、子育てしてても出来るような。そこに子育てやらネットワークが入ってくるようなことになれば地域が良くなるのではないかと思う。

委員) 企業も色々な努力をされていて、夏休みは子どもたちの見学を受け入れたり、工作教室などされています。そういった形で、地域で関わっていていると思います。

委員) 臨海部の工業の話と、生活に根ざしたもの。やっぱり重要なのかなと。そういうコミュニティビジネスやデジタルビジネスなどもこれから発展の可能性があるところ。

委員) 大企業は方針など本部で決まってしまう。神戸製鋼などもそう。火力発電をどうするのかとか。色々な問題がありますよね。環境問題などで神戸の灘の方でも反対運動が起こっていますし、その辺りが地域の住民に関係がないところで決まってしまう。撤退するとか。その辺りは難しいところですよ。そこに頼るのか、自分たちが新しく働ける場を創っていくのか、とか。そういったことも必要かなと思います。

委員) 産業があって、前から言っている核となるような場所があれば、交流が生まれてイノベーションなども生まれるかもしれない。シリコンバレー的なのが出来たらいいなと思う一方で、やはりブランチ経済と言いますか、意思決定をする訳ではないですよ。特に臨海部にあるような工場などは。本社の工場もあると思いますけれど、川崎重工などは地域外で意思決定されていて動いてしまう。色々技術の交流などでしょうと思ってもそこだけの意思決定で決められる訳ではないということがその辺り難しいところですよ。

委員) 「人・もの・情報がつながり、元気でにぎわう」というのも、どういう風に書いて良いのかわからないけれど、「磨きがかかったものづくり技術がグローバルな事業展開を牽引している」というのは、グローバルな企業とかに限ってここでは例に出しているということでしょうか。「人・もの・情報がつながり、元気でにぎわう」のが題なら、もう少し他にもあると思った。それに限ってというよりむしろ、他のこ

との方があるかなと思った。つながりとかそういう意味でも。それを取組に入れるのか。取組には入れていくと思いますけど。

副局長) どちらかというと、経済・産業の話ですけども。

委員) 4の「人・もの・情報がつながり、元気でにぎわう」なら寺家町もそうだし、そういう意味では地域がつながってにぎわっていくとなると、大きな技術の発展ということもあるけど、そういう人のつながりなども重要なかなと思った。少し考えてみてください。

委員) 地域の課題解決に向けたコミュニティビジネスというのがあっても良いと思う。

副局長) 入れても良いと思います。

委員) これも、全部絡み合っている。一応「自立・快適」など分けているけど、全てのことが絡み合っている。

副局長) 敢えて、1、3、5など分けているだけ。無理がある。

委員) 将来構想試案もみんな詰まっているから何がどうなっているかわからなくなる。これぐらい難しくなったら読みづらいですけど。全県の将来構想試案はカタログと呼ばれている。横文字が多いです。いちいち見たときにわからないですよ。今はスマホですぐ調べられるが。

副局長) この間高砂の総合計画審議会に出席したときに、最後で冊子ももう出来ていますけれど、委員の一人が「こんなに横文字ばかり並んでいてわからない」とおっしゃっていた。「横文字が多すぎる」と。

委員) 格調高く作らないといけないから難しいかもしれない。総合的に作った場合は格調高く。先生もたくさんいらっしゃるから格調高くしておかないと、つまらないものはつまらないと言われるし。難しかったら難しいと言われるけど、それでも落と

し込むときには本当は小学校5年生でもわかるようにしないとけない。

副局長) 今、気付きましたけど、今回の資料では逆に横文字がありません。

委員) 横文字がないのが読みやすい。将来構想と比べたらこちらの方が読みやすい。そういう意味ではわかりやすくする方がありがたい。

委員) もう少しわかりやすく。

委員) 代案がないので申し訳ないですが、将来像をもう少しわかりやすい言葉にしても良いかと思った。キャッチーでやわらかい。大川さんがおっしゃったような小学5年生ぐらいでもイメージが出来るような。代案がないかと考えていたが思い浮かばなかった。「自立快適」とかをもう少し。現行ビジョンでいえば「楽しいまち」とかすぐイメージが出来るような。

副局長) 「楽しいまち」とか「〇〇なまち」というのは、加古川市の総合計画が今年の3月か4月に出来て、それが「優しいまち」とか「〇〇なまち」で統一している。

委員) 末尾は「東播磨」が良いと思いますが、やわらかい言葉が。具体的にはイメージが出てきませんが。また今後考えていただけたら。

委員) 下の文章でフォローするか、中に入れるかという。「自立快適」とあって、下にやわらかい言葉を置くなど。もっとわかりやすいように。それも今後考えていきましょう。

委員) 熱心に議論をいただき、色々な意見が出ましたので事務局にはまた大変かもしれませんが。来月にはまた資料を修正いただいて、私たちが疑問に感じた課題については考えていただけるということで、今日のところはこれで終了したいと思います。

事務局) 今日いただいたご意見は取りまとめてまた後日皆さんに内容をご確認させ

ていただく。